

台湾の日本語学科の大学院生の日本語との  
かかわりについての訪問調査  
—進学前から卒業後まで—

王 敏東・鄭 凱文・仙波 光明

Career of Postgraduate Students of Departments of Japanese in  
Taiwan : Interview Study

Ming-tung Wang ; Cheng Kai-wen ; Mitsuaki SENBA

**Abstract**

This study interviewed 20 postgraduate students during April 2010 to July 2011, and concluded the following:

There are few students desire to study in Japanese Department as a freshman, but most of them decided to do higher study in Japanese Graduate Schools in their senior year. Many of the interviewees claimed that they would find a job if not being accepted by a postgraduate school. The criteria for students' sections on specific postgraduate schools included whether it is the students' alma mater, the policy of the postgraduate school, and the geological location of the school. Most students acquired the circumstances for the school, while some of them pointed out the difference between those stated on the webpage and the reality. Although with heavy study load, most students gained capability, not only in being awarded the degree, but also being promoted with logic training and data acquisition. Most interviewees agreed that the postgraduate study is an important stage in their life career.

**要旨**

本研究は2010年4月～2011年7月の間、台湾の日本語学科の大学院生20名を

対象に行なった訪問調査をまとめたものであり、以下のようなことが分かった。

大学入学の時から日本語学科を志望していた者はあまり多くない。むしろ、大学最後の年に日本語学科の大学院に進学することを決心した者が多い。しかも、その大部分は大学院に入れなかったら就職したという。大学院生が進学先を決める時決め手になったのは“母校であること”、“大学院の方針”と“所在地”である。大学院に入るにあたっては、大学院についていろいろ調べ、心の準備をした人が多い。ホームページに掲載された情報は、大学院に関する情報を把握するルートの一つであるが、実際の状況とは差があることが多くの大学院生によって指摘されている。実際に大学院に入った感想としては、学習上では大変なこともあったが自分の進歩・成長を感じたという人が大多数で、論文などをしあげるために資料を整理する力やロジカルに物事を取り扱う能力などを得たという。また、ほとんどの大学院生は、大学院が自分の人生における重要な段階であることを認めている。

## 1. はじめに

従来、台湾における日本語学科の大学院生に関する研究は稀で、管見のかぎり王・鄭 (2011)、鄭 (2011) ぐらいである。王・鄭 (2011) は台湾における9つの日本語学科の大学院生 114 名を対象に、(1)大学院に進学するまでの日本語の学習歴、(2)大学院に進学した動機、(3)大学院という学習段階で感じたこと、(4)大学院を卒業してからの進路または計画、についてアンケート調査をした。鄭 (2011) はさらに出身学科、留学経験、卒業との関係に着目して分析している。上記王・鄭 (2011)、鄭 (2011) のような、台湾の日本語学科の大学院生を対象とした調査研究は、彼らの生涯<sup>1)</sup>における“日本語”とのかかわりをかなり明らかに

<sup>1)</sup> 「生涯」について、羅他 (1991: 6~7) は Shartle (1952) の説をはじめとし、前台湾教育部長楊朝祥 (1989) の意見に至るまでの 13 人の定義をまとめた。それによると、八十年代以前は主に西洋人が「生涯」に関心を示していた。彼らのいわゆる「生涯」は職業に重点があったが、Super (1976) が主張している「生涯」には職業の他、思春期から定年後までの副業、家庭、さらに公民としての有給または無給のポジションという要素までが含まれる。その後、McDaniels (1978)、Webster (1986)、林幸台 (1987)、金樹人 (1988) などでも、人が一生のうちに従事する仕事の他、人間関係、衣食住や教育、休暇活動までが「生涯」の範囲とされている。羅他 (1991: 6) はこのような「生涯」を広義の「生涯」とし、さらに「生涯」には独特性、終生性、発展性、総合性があると指摘している。また、「人間は受精から誕生、そして人生を閉じる瞬間まで、生涯を通して意識や行動が変容し続けることを示す概念」だとする「生涯発達心理学」(『情報・知識 imidas』松田英子執筆) という分野があり、ポール・バルテス (1939~2006) が 1970 年代から 2000 年代にかけて提唱した生涯発達論を検討した論考 (堀 (2009)) などが数多く残されている。

したと考えられる。が、このような量的な調査では少数値が軽視されがちで、個人個人の経験・感想が日本語教育に提起する意味を見逃す恐れがあるのではないかと考え<sup>2</sup>、本研究はインタビューを通して、大学院生の生の声を記録・検討する。具体的には2010年3～2011年7月の間、H大学、M大学、N大学、S大学、TK1大学、TW大学<sup>3</sup>といった6つの台湾の大学の日本語学科修士課程<sup>4</sup>の院生20人にインタビューを行った。以下、この20人のインタビューを整理し、さらにインタビューで得た大学院生自らの体験を、西條(2007)などが提唱しているライフストーリーの形を参考しながら検討する。このような研究は、台湾における日本語学科の院生の、過去及び現在の実態を把握できるばかりでなく、日本語学科または日本の大学院に進学したいと考えている学生にとっても大いに参考になり得ると確信する。日本語学科(院)が院生の未来像を描くうえで、ひいては日本に留学に来る者を含めてより多くの大学院生を集める方法を検討するうえでも参考になると思われる。

## 2. 訪問調査

この節ではまずこの20名の大学院生について簡単に紹介する。次は訪問を受けた者の答えをまとめる。

### 2.1. インタビューを受けた大学院生の資料

20名の大学院生を対象としたインタビューの実施期間は2010年4～2011年7

<sup>2</sup> 例えば王(2004:17)には、質的な研究の目的は量的な研究の不足を補うことにある、とあり、陳(2002:4～6)は、質的な研究は、研究される者を独立した個体として尊重し、個人個人の生活の経歴や意味解釈を大事にしておき、世界をどう見るか、または現実をどう構築するかという方式で、(中略)例えば学生のような“人”の生存状態、感受、思惟の方法、行為や習慣などについて探求するものだと述べたうえ、労(2000)の質的な研究は…皆自然に見えた事実の背後にある利益関係、価値の選択や衝突が目的であるを引用しながら、いわゆる「質的な研究」は人間の価値欲求に大いに目を向けており、人間の道徳基準、様々な行為の動機や利益に対する関心が全て研究の重点で、研究される者の価値観や意味解釈はその者の行為や思想を理解する重要な基礎で、深く掘り下げたり誘発したりする必要があり、とも述べている。

<sup>3</sup> 調査を依頼した院生の中に、大学名を明示しないことを希望する者があるので、大学のローマ字つづりの頭文字(頭文字が重なる場合は2文字目まで、2文字目までも重なる場合はローマ字の後に番号)で提示する。

<sup>4</sup> 台湾の日本語学科では博士課程を備えている所は呉東大学のみであるため、今回は博士課程の学生については対象外とし、修士課程についてのみの調査である。調査の対象は調査を受けた当時大学院修士課程に在籍していた者と、すでに大学院修士課程を卒業した者に限る。

月である。また、この 20 人に関する資料は表 1 の通りである。

表 1 インタビューを受けた 20 人の大学院生の資料

番号	性別	年齢	大学院修士課程時の所属校	出身大学（学部）及び専攻	インタビューを受けた時に大学院を卒業したか否か
①	女性	二十代後半	TK1 大学	TK1 大学・日本語	在学中
②	女性	25 歳未満	TK1 大学	TK1 大学・日本語	在学中
③	女性	25 歳未満	TK1 大学	TK1 大学・日本語	在学中
④	女性	25 歳未満	S 大学	S 大学・英語と日本語のダブルメジャー	在学中
⑤	男性	二十代後半	M 大学	K 大学・日本語	OB（卒業して 1 年あまり）
⑥	女性	二十代後半	M 大学	M 大学・日本語	OB（卒業して 1 年あまり）
⑦	男性	25 歳未満	M 大学	SR 大学・日本語	在学中
⑧	女性	二十代後半	M 大学	TT 大学・言語と文学教育（教育学部）	在学中
⑨	女性	二十代後半	M 大学	SR 大学・財務金融学科（Finance and Banking）	在学中
⑩	男性	25 歳未満	M 大学	M 大学・日本語	在学中
⑪	女性	25 歳未満	M 大学	M 大学・日本語	在学中
⑫	女性	25 歳未満	M 大学	K 大学・日本語	在学中
⑬	女性	二十代後半	H 大学	H 大学・日本語	OB（卒業して 1 年未満）
⑭	女性	二十代後半	M 大学	B 大学・日本語	OB（卒業して 1 年未満）
⑮	男性	25 歳未満	M 大学	SR 大学・日本語	在学中
⑯	女性	25 歳未満	S 大学	TK2 大学・日本語	在学中
⑰	女性	25 歳未満	S 大学	M 大学・日本語	在学中
⑱	女性	25 歳未満	TK1 大学	TK1 大学・日本語	在学中
⑲	男性	三十代後半	N 大学	TK3 大学・日本語	OB（修士課程を卒業して 3 年あまり） <sup>5</sup>
⑳	女性	25 歳未満	TW 大学	TG 大学・日本語	在学中

今回インタビューを受けた者は男性 5 名・女性 15 名の計 20 名であり、年代別に言えば二十代 19 名、三十代 1 名である。所属する大学院は 6 校にわたる。また、修士課程在学者は 15 名、OB が 5 名、となっている。

<sup>5</sup> インタビューを受けた時点では TG 大学の博士課程に在学しているが、インタビューの内容は N 大学修士課程在籍時のことについてである。

## 2.2. インタビューの内容と結果

この部分の設定は“描写的”または“解釈的”なもの<sup>6</sup>とする。インタビューの内容は大きく(a)大学院修士課程に進学するまでの日本語の学習歴、(b)大学院という学習段階で感じたこと、(c)大学院を卒業してからの進路または計画という3つの部分から構成されており、それぞれ「QA：大学入試で何学科を志望したか。（理由は何か。）」、「QB：いつから日本語学科の大学院に入ろうと思うようになったか。（理由・きっかけまたは経緯はどうなっているか。）」、「QC：もし日本語学科の大学院の入学試験に落ちたら、どうしただろうか。」、「QD：日本語学科を有している大学院はたくさんあるが、現在の大学院を選択した基準は何か。どういう気持を抱いてその大学院に進学したか。（例えば大変だろうと予想したか。）」、「QE：日本語学科の大学院に関する情報を把握したルートに「ホームページ」が含まれている場合、そこに掲載されている情報は実際の状況と差があると思うか。」、「QF：大学院での学習で持っている感想について、何か予想と違うことがあったか？あるとしたら、具体的にはどういうことか。」、「QG：在学期間中最も大変なまたは苦勞していること（最も大変であった、または苦勞したことは）は何か。」、「QH：日本語学科の大学院で訓練されたことまたは学んだことは将来（例えば就職）にどう役立つと思うか。また、大学院での研究と（卒業後の）仕事とのつながりはどうなっているか。」となっている。インタビューは全てインタビューを受けた者の母語である中国語によって行ったが、筆者により日本語で文字化した。この節では基本的には、インタビューで得た豊かで大量な情報（厚い記述；thick description）<sup>7</sup>より、「人—コンテクスト—シチュエーション」（person-context-situation）に基づき、コンテクストに裏付けられている意味（meaning in context）を見出してまとめる。また、全体的な現象を説明するために大学院生の答えを列挙するが、どの大学院生かという身分の特化をしない。以下、質問A～Kの順で述べていく。

### QA：大学入試で何学科を志望したか。（理由は何か。）

この質問は、王・鄭（2011）の調査で、日本語の勉強を開始したきっかけは「大学入試での成績で行けそうな所が日本語学科であったから」と答えた院生が

<sup>6</sup> この2つの性質の設定は現象の状態と意義が探究でき、質的な研究に向いているためである（陳（2002：28））。

<sup>7</sup> Geertz, Clifford（1973：3）。

22.8%にのぼる<sup>8</sup>ことが報告されたため、学生の当初の志望学科を明らかにしたくなって加えたものである。まず分かったのは最初から日本語学科を狙っていた者は少数だということである。また、当時の志望学科はいろいろあり、例えば、以下のような答えがあった。

◎<sup>9</sup>法学、社会学、犯罪学などの学科が志望学科であった。

◎公共関係及び広告学科（The Department of Public Relations and Advertising）に入りたいかったが、家族が反対したためあきらめた。

◎もともとできれば（点数が足りれば）企業管理を学ぼうとした。大学に入ってから日本語と企業管理というダブルメジャーで行こうと思ったが、日本語だけで精一杯だったので、日本語だけに専念するようにした。

◎英語学科ばかりである。

◎英語学科である。しかし、点数が足りなかったため、出身の学科（非日本語学科）に入った。

◎自分の出身の学科（非日本語学科）である。

◎建築、空間デザイン関係の学科である。

◎実は最初は日本語学科に入ろうとは思わなかった。数学は苦手だし、英語はまあまあという感じ、特に好きな科目もなくて、母親の薦めで日本語学科に進学するようになった。

◎韓国語学科か、情報管理学科である。

◎私は「五専」<sup>10</sup>の出身である。その時は、理工専門の科しか選択できなかった。もしその時に外国語の選択肢があれば、私は外国語学科<sup>11</sup>を選んだかもしれない。

また、「◎正直言って、はっきり覚えていない。が、他に選択肢があったとしたら、マスコミ関係の学科だったのだろうか。でも、その時は自分が何に向いているかと真面目に考えたことはなかった。1つだけ、数学がすごく苦手なので、数学の必要な専門の学科には絶対に入りたくないというのがあった。さらに大学入試の成績が悪かったうえ、実家の台北を離れてほしくないという両親の希望にし

<sup>8</sup> 10の選択肢の2位にランクされている。

<sup>9</sup> ◎印は、筆者により日本語で文字化したものであることを示す。以下同様。本稿における文体統一のため、インタビューにあった口頭表現や笑い・溜め息などを修正した。また、インタビューの内容は9人の対象者の理解を得て録音した。筆者により日本語で文字化した内容は2011年7月までにインタビューを受けた本人（20人全て）に確認済みである。

<sup>10</sup> 中学を卒業してから進学する5年制の教育機構で、学歴としては日本の短期大学に相当する。

<sup>11</sup> 日本語にこだわらず、別の外国語の可能性もある。

たがおうとしたため、選択できる範囲が狭かった。」というのもあった。

一方、選択肢に日本語学科が入っている回答もある。

◎外国語が好きだから、日本語学科に進学した。どうして他の外国語でないか  
という、英語なら高校以前よりかなり勉強してきたから、何か別の台湾と  
密接な関係を持っている外国の言葉に、ということだった。

◎申請入学で日本語学科に進学したが、もし他に選択することができたら、フ  
ランス語学科か英語学科を志望した。

◎日本語学科である。他に中国語学科或いは、管理学科も考えた。

◎私は大学入試で日本語学科を志望した。しかし、もし選びなおせば、新聞  
学科と法律学科にも興味がある。

◎外国語関係の学科だった。

◎大学の歴史学科であった。他に言語系の学科も考えた。

最後に「◎高校時代より日本のドラマが好きで、推薦入学で日本語学科に入っ  
た。」「◎志望の段階で候補にあげたのが日本語学科ばかりであった。」という  
ような、大学入試の段階ですでに日本語学科しか考えていなかった者もいる。

これで、大学院生の大学入試での志望はそれぞれに理由があり、ばらばらであ  
るが、最初から日本語学科に入ろうと思っていた者は多くないことが分かる。そ  
れで、次の質問の「いつから日本語学科の大学院に入ろうと思うようになったか」、  
または「理由・きっかけまたは経緯はどうなっているか」を知りたくなる。

**Q B : いつから日本語学科の大学院に入ろうと思うようになったか。(理由・き  
っかけまたは経緯はどうなっているか。)**

この質問は院生が日本語学科の大学院に進学すると決心したきっかけ・原因や  
心理過程にも触れながら見てみたい。

まずは、大半は大学の最後の年に決めており、就職してから大学院への進学を  
決意した者も少数ある、ということが分かった。その理由・きっかけは家族（特  
に親）の影響（「◎入学試験日より1ヶ月前頃に、父の勧めで入試を受けること  
にした。」）、学位の取得（「◎大学4年の時、修士号がほしかったからである。」  
「◎普通の高校に進学してから、大学を出ただけでは（この学歴では生活してい  
くのに）不十分だろうと思い、その時から、自分が将来必ず大学院まで行くと決  
めていた。が、真剣に準備しはじめたのは大学4年の時である。」「◎大体大学  
3年目の後半から4年目の前半にかけての頃である。より高い学歴を持ちたいと  
思い、当時唯一の専門の（進学するならば自分の最も有利な条件でもある）日本

語を武器に、出身学科の大学院の入試を受けた<sup>12</sup>。入試準備のため、院に通っている先輩にアドバイスをもらい、日本語学科の大学院入試準備の塾まで行っていた。」）や、教師になるのに大学院を出た方がいいという考え<sup>13</sup>（「◎大学4年生の時である。教師になりたいと思っていたからである。」「◎将来日本語の教師になりたいので、日本語学科の大学院での訓練と学歴が必要だと思う。」）があげられる。また、「◎最初は他所の大学の別の学科の大学院に進学した。その大学院に行って、学部が日本語学科の出身なので、その学科の専門知識が乏しいと思ったうえ、そちらの教師の教え方に慣れていないなどの理由で、改めて日本語学科の大学院に進学しようと思うに至った。」のもあった。

それに対して、大学卒業後の目標がまだ分からない者もいた。例えば、「◎大学4年になった当時の私は就職する（心の）準備が不十分で、とりあえず先に大学院にでも入ろうかと思った。」のような声があった。また、レベルがやや異なっているが、「◎大学4年、卒業をひかえた時に、進学か就職のどちらかにしようかと迷っていたが、自分が歴史に興味があるから、理想の大学院に入れば入ろう（入れなかったら就職に）という気持ちで大学院の入試を受けて、そして、受かったという感じだった。」<sup>14</sup>という、大学卒業時にとりあえず大学院の入試を受けてみて、受かったら進学という、自分の強い意志ではなく、ある程度成り行きに任せる、という考えを持っていた院生もいる。

もちろん、次のように自分の志向・求めるものをはっきりと認識している人もいる。

◎大学を卒業してから1年3ヶ月東京（渋谷）にある日本語学校で勉強し、その後帰国してしばらく仕事をしていた。仕事をしている時、修士の学歴を持ちたくなり、修士課程に入ることにした。友達のほとんどは進学するなら欧米に留学していた。自分は英語が不得意なかわりに、日本語ができるから、日本語学科の大学院にと、思うようになった。

◎大学2年の時、ある先生のもとで研究をやり始めた。それがきっかけで、研究に興味を持つようになった。また、大学卒の学歴では仕事上の競争力が足りないかと思い、進学した。

<sup>12</sup> 他所の大学の日本語学科（2ヶ所）も受けたが、落ちた。

<sup>13</sup> 必ずしも教師になるための学位取得でなく、「◎私は大学を出た後、日本語の教師を始めた。その時から、自分の日本語教育に関する専門知識が足りないと感じるようになり、大学院に入って、自分の不足を補わなければならないと思うようになった。」というのもあった。

<sup>14</sup> 進学した大学院に日本と台湾にかかわる歴史を研究している教師がおり、そのような授業がとれる。



**QC：もし日本語学科の大学院の入学試験に落ちたら、どうしただろうか。**

この質問は院生たちが大学院に行く意欲・決心がどのくらいあったかを知るためのテストである。答えは前問（「QB：いつから日本語学科の大学院に入ろうと思うようになったか。（理由・きっかけまたは経緯はどうなっているか。）」）と照らしあわせて見ることができよう。つまり、日本語学科の大学院への愛着がどのくらいあるか、その理由は何か、のことである。

この質問に対して、「◎落ちたら、受けなおしたと思う。」というように、日本語学科への愛着度が高いことを示す回答が見られた。しかし、「受けなおす」の意味するものは、以下に示すように多様である。

◎もし落ちたら、もう1度だけ挑戦し、また落ちたら、あきらめてそのまま元の生活<sup>15</sup>を続けようと思った。

◎実は前に1度他所の日本語学科の大学院を受けて落ちたので、今行っている大学院は私にとって2回目の日本語学科大学院へのチャレンジだった。もし今度もだめだったら、先に兵役を済ませようと思った。

◎実はうまく大学院入試に合格したのは卒業してから2年目のことである。卒業した年にも受けたが、その年には高校での教育実習の準備もあったので、院の入試に落ちた。それで、高校の実習教師を1年しながら、入試の準備をしていた。もし今回もだめだったら、大学院と縁がないというか、チャンスに恵まれなかったと考えてあきらめるか、とりあえず先に就職してまた例えば社会人の院生を受け入れる“在職班”でも受けてみようと思ったが、幸いに2回目は受かった。

◎また受け続けたと思う。しかし、日本語学科の大学院だけに的を絞るのではなく、別の（自分にとって）入りやすそうな、例えば（英語が得意だから）英語学科の大学院を目指すようになっていたかもしれない。

一方、大学を卒業したら、基本的には社会で適当な職を見つけ、独立して生活する能力が備えられていると考えられるので、「◎落ちていたら、就職しただろう。」と思う大学院生は相当いる。ただしそのような院生の中には、「◎日本で就職しただろう。」と就職の場所を日本だと決めていた人や、「◎直接日本に行ったと思う。」のような「日本」にこだわった意見もあった<sup>16</sup>。

この部分の回答を全体的に見ると、どうしても日本語学科の大学院に行きたい

<sup>15</sup> 日本語の教師。

<sup>16</sup> ただし、日本に行く目的が何か、ははっきり示されていない。

という者はどちらかと言えば少なく、大学院に入れなかったら就職するという人が大多数である。

**QD：日本語学科を有している大学院はたくさんあるが、現在の大学院を選択した基準は何か。どういう気持を抱いてその大学院に進学したか。（例えば大変だろうと予想したか。）**

2011年10月の時点では台湾で（日本語学科の）大学院（修士課程）の数は19もある<sup>17</sup>。院生たちがどのような基準で進学する大学院を決めたかを把握するために、このような質問を作成した。また、その選択基準は学生の大学院に進学した時に抱いた気持と深くかかわっていると思われるので、学生の大学院を決めた基準とあわせて質問することにした。

基本的に、大学院生は大学院に入る前から大学院についていろいろ調べ、心の準備をしていた、という結果を得た。大学院生が進学する大学院を決めた基準を大別すると“自分の母校”、“大学院の方針”、“所在位置”、となる。

“自分の母校”を選択基準にしたという回答には例えば次のようなものがあつた。

- ◎日本語学科の大学院ならば、母校の院しか考えられなかった。自分の出身の学科であるうえ、先輩からいろいろ聞かされて、この大学院に一定の認識を持っており、自分が興味を感じる授業内容だと確信していた。入った当時は、コマースのせりふにある“期待しながら傷つくの怖がっていた”<sup>18</sup>というような気持だったろうか。
- ◎母校の院に進学したので、学習環境や学科の雰囲気をよく知っていて、適応の問題はない。とは言っても、やはり緊張や不安の気持を免れることはできなかった。それは、私は大学（日本語学科）を卒業してから1年間別の大学院に入っていて、日本語をしばらく勉強していなかったからである。
- ◎3ヶ所しか受けていないが、いずれも北部にある大学だった。特に、自分の母校に進学したら、新しい環境に慣れる必要がないのは何よりである<sup>19</sup>。

<sup>17</sup> それぞれ開南大学、義守大学、元智大学、慈済大学、静宜大学、政治大学、大葉大学、台中科技大学、台湾大学、淡江大学、高雄第一科技大学、長栄大学、東海大学、東呉大学、南台科技大学、文化大学、輔仁大学、銘傳大学（以上50音順）に所属しており、このうちに淡江大学には、日本語学科所属の修士課程と、別の「亜洲研究所日本研究組」の2つがある。

<sup>18</sup> 台湾の七十年代のシャンブーのコマースにおける有名なせりふである。

<sup>19</sup> 実は受かったのも母校の院のみだった。この院生は「また、院の方針も考慮に入れている。例えば、重みが文学に置かれている院は全く私の考慮の範囲外である。」と答えている。

しかし、「◎実は大学の時中国語の教師になりたかったので、S大学の華語教育学学科の大学院の入学試験を受けたが、受からなかった。それなら、自分の出身学科（母校の日本語学科）にでも受けてみようと思い、応募した。そういう意味で、私は日本語学科に関して特にどの大学を狙ったというようなことはなかった。その時は今通っている大学院の1ヶ所しか受けなかった。こういう、（就職への不安もあり）、一番行きたい大学院に入れない、という気持ちで日本語学科の大学院に入った。自分はとても研究や論文を書くことができないのではないかと考えていたが、にもかかわらず入学した。」という、自分の母校の日本語学科を二次的な選択にした院生もいる。“自分の母校”なら一種の安心感が得られるというのが見て取れる。

“大学院の方針”については例えば次のようなものがある。

- ◎大学卒業の直前には、心のどこかに、大学で学んだことに満足しておらず、日本語（にかかわること）をより深く勉強したいという思いがあり、大学院に進学しようと決心した。大学院の方針で自分の進学するところを決めた。今行っている大学院は自分の興味に合いそうで、受けてみた。
- ◎大学院のカリキュラムで決めたのである。ビジネスに関する知識を身に付けたいから、企業と何らかのつながりがある大学院ならいいと思った。
- ◎大学院の専門分野を考えて進学する大学院を決めた。実は大学を卒業してから高校で兼任教師として日本語を教えている。こうして実際に教えてみれば、大学を卒業しただけの自分が教師としてまだ足りないところがあると気付くところもあり、また大学院に進学しようと決心した。大学院では日本語教育に関する専門知識、例えば教材のデザインや教授法などについて自分のほしいもの（知識）が獲得できるだろうと予想していた。
- ◎日本語教育という専門分野に重点がおかれた大学院、そして交換留学制度が施行されている大学院を選んだ。将来教壇に立つことができたらというような希望を込めた気持ちで大学院に入った。大変だろうという心配はなく、たとえ大変なことがあっても、あくまでも人生における1つの段階だからと思った。
- ◎いわゆる伝統的な日本語学科にはあまり興味を持っていなかった。つまり、大学院を選択した基準は「応用日本語」<sup>20</sup>の大学院ということだった。

<sup>20</sup> 応用日本語学科は、カリキュラムに“日本語”以外にビジネスや観光など別の専門知識を加味した、従来の“日本語”または“日本文学”を専門とする日本語学科とはやや異なる日本語学科である。台湾では1996年にはじめての応用日本語学科が銘傳大学に設立されて以来漸増し、2012年現在、台湾における日本語学科の半数を超えるに至っている。

そのうえ、「◎主に大学の評判と自分の興味に合うかどうかという2つの基準で進学する大学院を決めた。もともと勉強や研究が好きなので、大学院に行くのはある意味で自然な選択肢の1つで、特にどうこうというような深い気持ちはなかった。」のような、世間のその大学に対する評判を加味して考えたものや、「◎大学院に入る時には、日本文学について研究しようと思ったが、実際に入ったら、学科の方針とずれがあると分かり、院で別の分野にも興味を引かれ、修論のテーマを変えた。」のように、大学院に入る前に関心を持っていた分野とは違う分野のテーマに着手したという意見もあった。

また、大学院の所在位置を考慮に入れたものとして次のような声があった。

◎大学院を受ける時は入試の科目と学校の所在地で決めた。というのは大学の時、いわゆる専門科目がなかったからである。

◎実は大学を卒業した時には、自分の日本語に自信がなかった。このまま就職できるかと不安だった。それなら、大学院に行って、もう少し自分を鍛えたら、と自分に就職以外の別のチャンスを与えた。が、ある意味で就職回避かもしれない。進学するという方向を決めたら、次はどこに行くかの問題に直面するようになり、文学に興味がないので、文学専門の院を先に排除した。それから、各大学院のホームページを閲覧したら、通っていたM校のカリキュラムに引かれた。おまけに、この大学は家に近いので、何となくそこに決めてしまった。

◎T市に住んでいるので、T市にある大学を優先した。また、通っていた大学よりいい大学<sup>21</sup>の大学院、というのが選択基準だった。今の大学院に受かり、とても嬉しくて、いい修士論文を出したいと思った。

一方、「◎どの大学院に入るかを特に決めていなかった。」「◎入試を受けることを決めたのは割と遅かったので、応募できる場所はそれほど多くなかった。それで、時間的に間に合ったところだけを受けた。」というのもあった。

「どういう気持を抱いてその大学院に進学したか」という部分に対して、「◎私が日本語学科の大学院に進学しようと思い立った時、すでに日本語学科の大学院に通っている昔(大学)のクラスメートがいた。その人に日本語学科の大学院に関することをいろいろ聞いた。クラスメートの話で大学院における授業の進め方などを大体把握していたので、この方面については特に大変だとか苦労したとは思わない。」「◎大学院に入ろうとする前に、大学と塾の先生に相談した。大

---

<sup>21</sup> 「◎前の大学に不満を持っているわけではないが、台湾は学歴社会だから、よりいい大学に入ったら、自分にとって有利だと思った。」という。

学院というのは、それまで自分が勝手に思っていたような、日本語力（四技能など）をアップすることが主な目標とされているところではなく、研究するところだと分かった。自分は日本語教師になりたいので、ここに決めた。」のように、前もって真剣に調べて、大学院の具体像を把握したうえ、心の準備をした者がいる。また、「◎受かった時は、あまりに嬉しかったから、研究が大変だろうと思ったことさえなかった。」や、「◎合格したことが分かった後も、しばらくアルバイトをしており、ぜんぜん日本語を勉強していなかった。母校の大学院だったら、（合格した大学とは違い）院生たちが皆楽しそうにみえたので、大学院ってそんなもんだろうと勝手に勘違いした。」のように、あまり深く考えずに進学したと思われる者もいる。

**Q E：日本語学科の大学院に関する情報を把握したルートに「ホームページ」が含まれている場合、そこに掲載されている情報は実際の状況と差があると思うか。**

王・鄭（2011）の調査によると、院生が日本語学科の大学院に関する情報を把握したルートとして「ホームページ」が最も多く利用されている<sup>22</sup>ことが分かる。しかし、ホームページに掲載されている情報は対談形式でなく、（掲載側が）一方的に情報を掲載し、（閲覧した側が）一方的にそれを見て“理解・吸収”するという性質を有しており、「日本語学科の大学院で勉強していた（またはしている）先輩や親戚・友人」「大学院に入る前の学校の先生」<sup>23</sup>などのルートとは性質が異なっている。したがって、この最も多くの院生に利用された“大学院に関する情報のルート（及びその情報）”が実際に院生たちにどのように思われているかを探究する。

まず、ホームページに掲載されている情報を肯定的にとらえる意見として次のようなものがある。

- ◎今通っている大学院に限っていえば、ホームページに掲載されている情報と実際の状況とはあまり差がないと思う。
- ◎私は大学のホームページと、掲示板に掲載された各大学院の応募のポスターで日本語学科の大学院に関する情報を把握した。大学院での授業は毎年の状況によって変更されることもあるだろうし、出てみないと分からないことも

<sup>22</sup> 44.2%の院生が利用したという調査結果であった。

<sup>23</sup> 王・鄭（2010）の調査で「日本語学科の大学院で勉強していた（またはしている）先輩や親戚・友人」「大学院に入る前の学校の先生」から情報を得た院生はそれぞれ 25.7%と 15.5%だと報告されている。

あるが、ホームページに書かれた情報はまあまあ事実だと見えよう。

◎私が出身学科の1回生で、聞く先輩はいないので、大学院に関する情報は全てインターネットで調べた。基本的にはホームページに掲載された情報は十分だと思うが、実際と差があったとしても、自分の認識が足りないせいで起きた誤解だろう。

◎ホームページの他、塾の先生もいろいろ教えてくれた。特に予想と違う感じはしなかった。大学院というのは大体どこもこんな雰囲気だろう。

しかし、ホームページに掲載されている情報に対する不満も、以下のように多く見られた。

◎ホームページに掲載された情報は現実とは必ず差がある。

◎大学院に入る前には大学の先生から院に関する情報を多少耳にしたが、実際に入ったら、何もかも想像とは異なっていた。

◎ホームページに掲載されているカリキュラムは語学(言語学、日本語学など)、日本語教育、日本文化の他、日本経済や産業日本語などが含まれており、豊富だと思った。私は経済、産業日本語を狙ってこの大学院に来た。が、実際に入ったら、予想と落差があり、この院は日本語教育にあまりに重点を置きすぎである、と感じた。

◎もちろん各日本語学科のホームページを調べた。カリキュラムを例にすれば、ホームページに提示されている情報はやや簡略なものだと思われる。

◎どこの大学院も似たようなものだろうが、ホームページに掲載されている情報(特にカリキュラム)は実際とかなりの差があるように思われる。カリキュラムに書かれている科目は、とる人数が足りない、担当するはずの教師の突然の転職など、何らかの理由で開講されないことがよくあるらしい。

◎そこ(ホームページ)に掲載されているカリキュラムなどの情報は面白そうではあっても内容や教師などの面で実際とは違っている点もある。

◎かなり差があると思う。例えば、掲載内容によるとある分野のカリキュラムが充実しているように見えたが、実際にはその課程に対応する専門分野の教師がいないというようなことがあった。それは私にとって、非常に抵抗がある。

また、「◎そこ(ホームページ)に書いてある情報から大学院に関する全ての情報を把握するのは無理に決まっている。学校によって違う事情もあるだろうし、他人の経験は直接自分の参考になるとは限らないものだから、一概に言えない。」

「◎ホームページを通してカリキュラムの概要や学科(大学院)の方針などが分かるが、実際とは当然差がある。例えば教師が指定した教材、授業の進み具合は

ホームページに掲載されている情報だけではうまく把握できないし、おまけに各科目の担当の先生が毎年決まっているとは限らないから、授業の進み具合も教師によって変わるだろう。」「◎ホームページだけでは足りない。授業の内容は毎年違うから、ホームページはあくまでも参考程度である。」のような“大学院に関する情報はホームページだけでは足りない”という大学院生の声が伝わってくる。これらの意見は学科側に対して、ホームページを改善するヒントにもなると思われる。

**Q F : 大学院での学習で持っている感想について、何か予想と違うことがあったか？あるとしたら、具体的にはどういうことか。**

この質問は実際に大学院に入ってから感じたことを自由に述べさせる設問である。その予想と異なった部分が必ずしも自分にとってマイナスになるとは限らず<sup>24</sup>、むしろ自分の何らかの進歩・成長をもたらしたと自覚している院生が多い。

- ◎改めて台湾を理解しなおした。日本統治時期の台湾、まだ一般に広く知られていない台湾をより深く認識した。
- ◎わずかずつではあるが、“研究”の雰囲気、身をもって感じてきている。
- ◎大学院で習ったのは研究方法と研究者としての基礎能力だと思う。
- ◎日本（語）の発想で、言葉を学んだり物事を見たりするようになった。
- ◎基本的には充実していると思う。意見の表し方や資料整理のし方など、自分の進歩を実感している。
- ◎基本的に授業中における聞くこと、話すことなどは全て日本語で進められており、教材も日本（語）のものが使われており、読む文献も日本語で書かれたもので、おまけに日本人のクラスメートがいるおかげで、自分が日本語で何かを書く時に頼りになるから、大学院での勉強は四技能の全てにおいてプラスになっていると思う。また、自分に読む習慣が身に付いたという予想外の得もある。
- ◎大学院での学習は大学での勉強とほとんど違う。内容が深くなっており、分析に重点が置かれているなどの点が大学での勉強と特に異なっている。大学院に入って、自分が伸びる可能性がまだまだあると分かったが、研究という

<sup>24</sup> 例えば「◎授業の進み方（ゼミ）は予想と全く異なっている。最初の時はパワーポイントさえ使えなくて、口頭発表はものすごくハードであった。発表はともかくとして、質問・批判されるのには非常にプレッシャーを感じていた。でも、今考えてみれば、それはよかった。おかげでパワーポイントも使えるようになったし、院を出てから余所の誰かに指摘されるより身内の先輩に厳しく指導される方がためになるし、まだまだだと思うからである。」という意見があった。

のは本当に面白くて魅力的だと改めて思い、大学院は思考力を鍛える場所だとしみじみ感じた。

- ◎学部では先生が教えてくれることを覚えるだけで十分であるが、院では自ら観察し、今まで当たり前のように思っていたことも見なおさなければならないというようなことを学んだ。

**Q G : 在学期間中最も大変なまたは苦勞していること（最も大変であった、または苦勞したことは）は何か。**

院生は、大学院の在学期間中、学習<sup>25</sup>、アルバイト<sup>26</sup>そして個人の健康<sup>27</sup>や、人間関係などいろいろ苦勞したことがあるだろう。そのようなもののうち一番大変であったのは何であったかを探ると、彼らの苦勞だとしてあげたものの多くは学習に集中していた。中でも話す（口頭発表や自分の意見を述べる）こと<sup>28</sup>、大量な文献を読むこと、論文をまとめるまたは書くことがよくあげられている。具体的には、次のような回答があった。

- ◎意見の述べ方だと思う。院の授業はディスカッションによって進めていくものが多く、自分の意見を思う存分述べられない悔しい経験は何度もあった。
- ◎話すことに自信がないので、口頭発表に当たらずごく大変だ。また、書くのも得意でない。限られた時間内で正確に日本語の文章を書くのも私にとって一難事である。
- ◎レポートのまとめ方である。学部でそのような訓練を全く受けておらず、院に入ってレポートのまとめ方なり（口頭）発表のし方なりがぜんぜん分からなかったのが、最初はかなり不安だった。
- ◎じっくり最後まで論文を読むことである。自分の短気な性格のせいであろう。
- ◎大量に読むことは大変である。
- ◎文献の整理である。つまり、先行研究からの問題の発見や、研究の流れの整理などのように、文献から多くのことを見つけ、そしてそれに基づいて自分のものを構築するには時間も知恵も要る。

<sup>25</sup> ちなみに、王・鄭（2011）は大学院生の「日本語学科の大学院に入る時点での学習目標のうち、到達したもの及び到達できなかったもの」についても調査している。

<sup>26</sup> 王・鄭（2011）では「日本語学科の大学院在学中に、日本語とかかわるアルバイトをしたことがある」院生が 67.5%もあることが明らかにされている。

<sup>27</sup> 例えば「◎体力である。もともと丈夫なわけでないうえ、毎日の学習に応じ新しい課題をこなさなければならないのできつい。」などがある。

<sup>28</sup> それに対して「◎苦勞というより、話すチャンスが少ないことがやや不満である。」という意見もある。



- ◎大学院1年の時、大量の文献を読んだことが一番苦労したことだと思う。文学を例にすれば、専門性が高いうえ、日本語特有の婉曲表現を多く含むので、内容の理解さえ難しくかった。今は、何といても論文を書くこと（特に独自の視点）に一番悩んでいる。
- ◎大学院に入る前に、あまり日本人の先生にお世話になっていなかったのですが、大学院に入った最初の頃は自分の聞く力にあまり自信がなかった。でも、一番苦労したのは何と言っても論文を書くのに必要なロジカルにまとめる能力を養成した過程だと思う。慣れるまで約1学期間という長い時間が必要であった。
- ◎最初は四技能全てにわたって自分の能力が足りないと思っていた。特に聞く能力の不足は自分の一番の弱点だと思う。それから、何とんでも、2年間で卒業できなかったのはすごく気にしている。
- ◎宿題（レポート、発表など）が重なることである。
- ◎期末レポートが一番大変である。各授業のレポートのテーマは自分の研究と関係ないことがよくあり、得意でないこともやらなければならないのは大変だと思う。
- ◎1つだけちょっと自分の気持を抑えてやらなければならないことがあった。うちの学科（大学院）は主に3つの専門分野から構成されているが、院生は全員自分の専門以外の他の2分野の授業を4単位とらなければならないこととなっている。このような、自分の得意でなく、好きでもない授業をとる必要があるのはやや大変だった。
- ◎ゼミや報告などが多すぎることである。小クラス（5～6人）なので、自分の担当の部分を発表し終わったと思うと、またすぐ次の番がまわってくる、というような状況がよくある。それに、家庭教師のアルバイトと、大学の第二外国語のTAをしているから、時間が足りないとつくづく思う。「昼は授業、夜はレポート、宿題」という繰り返しに陥っているような感じである。
- ◎授業の進度（ゼミ）以外、マスター2年の英語という必修科目の履修は大変だった。日本（語）に関する科目でいえば、日本文化という授業も大変だった。教科書の内容も難しかったし、何を伝えたいのか理解しにくかった。
- ◎勉強しなければならないことが多すぎて、最初の時は自分がクラスメートに遅れているかとちょっと心配していた。講義の内容が難しく、自分の能力ではとても無理だという感じだった。

**QH：**日本語学科の大学院で訓練されたことまたは学んだことは将来（例えば就

職)にどう役立つと思うか。また、大学院での研究は(卒業後の)仕事とのつながりはどうなっているか。

大学院でいろいろなことを勉強し、身に付けたと思われるが、そのような勉強は自分の将来にどうつながっていくかということを院生自身に分析してもらおう。

Q Bの大学院に進学した理由にある“学位の取得”と呼応するように、「大学院での研究の(卒業後の)仕事とのつながり」にも“学位の取得”があげられている。

◎将来の就職に一番プラスになるのはたぶん“修士”という学歴そのものだろう。

◎大学院での研究が(卒業後の)仕事に与えた直接の影響を考えると、私の場合は院に入る前より高校の兼任教師をしているので、実質の給料は変わらないが、修士号を持っていることが雇用上有利になるかもしれない。

また、Q Gの「在学期間中最も大変なまたは苦勞していること」の、例えば“話す(口頭発表や自分の意見を述べる)こと”、“大量な文献を読むこと”、“論文をまとめるまたは書くこと”が、そのまま「大学院で訓練されたことまたは学んだこと」にもなっているような結果を得た。

◎人の前で口頭発表する訓練は将来の就職に大変役に立つだろうと思う。

◎まず、読む能力が向上したと思う。また、日本語教師志向なので、修士論文は動詞を取り上げたいと思い、これで自分の研究と将来の仕事とのつながりができたと思う。

◎四技能に関しては、大量な日本語の文献を読む必要があるので、読む力は大幅にアップしたと思う。また、大学院での勉強全体で思考力も増大したと思う。

◎修士論文をまとめることはロジカルに思考することと書く力を伸ばしたと思う。

◎四技能の中では、大量な文献を読まなければならないので、読む力が大幅伸びたと思う。また、ヒヤリング能力も向上した。他に、何もかも自分の力でやらなければならないということを深刻に実感した。それにより、独立した研究能力を含め、いろいろな面で成長したと思う。そして、ストレスにも強くなった。

◎研究方法に関しては大学院での勉強は少し役に立ったと思う。もし、将来研究者になるなら、修士課程で覚えた研究方法は将来の就職に役立つと言える。

◎訓練というよりむしろよい態度の養成が将来の就職に役立つと思う。

なお、専門知識の獲得は「◎日本語を教えるのに非常に役に立っている。」という。

しかし、大学院で学んだことを「◎どうして就職や何やのためでないかだめだろうか。純粋に興味のためではいけないだろうか。」という趣味にとどまっている意見もある。

また、まだ在学中だから、大学院で訓練されたことまたは学んだことは将来（例えば就職）に役立つかどうか言い切れないという保留的な意見もある。

◎将来どんな仕事をするか分からないので、院で学んだことがどう役立つかは断言できない。

◎修士論文の具体的な方向はまだ決めていない。将来の仕事と何らかのつながりができたらいいと思うが、無理やりに結び付けるつもりはない。

最後に、何らかの理由で、大学院で訓練されたことまたは学んだことがは将来（例えば就職）に役立つかどうかについて悲観的に思う者もある程度いる。

◎仕事の内容が自分の思うように決められないことが多いので、今の研究はもしかして将来の仕事に応用できないかもしれない。

◎日本語を生かせるような仕事をしたい。将来の仕事は修士論文のテーマとあまり関係がないだろうと思う<sup>29</sup>。

#### Q I : あなたにとって日本語学科の大学院は何か。何にたとえられるだろうか。

別に行く義務があるわけではない大学院は院生たちにとってどのような存在で、何を意味するだろうか。

彼らの回答は、“なくてもいいが、あった方がいい”<sup>30</sup>、“学位をの取得する場所”<sup>31</sup>、“（何かとの）架け橋のような存在”<sup>32</sup>、“大事な存在”に分けられる。学位取得や、基本的には「◎専門知識を学ぶ環境である。」「◎研究方法を学んで、ロジカルに物事を考える訓練を受けて、そして人との応対方法を身に付ける場所だった。」というように知識の学習・経験を積み、学位を取得し、それで「◎大学院を卒業し、職に就く準備ができたなら、胸を張って就職すると思う。」という場所である。しかし決してそれだけではなく、次のように、少なからぬ院生にとって“大事な存在”と考えられている。

<sup>29</sup> ちなみに、王・鄭（2011）によると、指導教官を決めた理由は、58.5%の人が「指導教官の専門が自分の研究したいテーマと合うかどうか」、34.1%の人が「指導教官の性格・人柄」、3.4%の人が「指導教官のポジション・肩書きなど」であったという。

<sup>30</sup> 例えば「◎なくても構わないが、あった方がいいと思う。」という回答があった。

<sup>31</sup> 例えば「◎日本語学科の大学院がもたらすのは紙一枚（修士課程の卒業証明）であらう。」のような回答があった。

<sup>32</sup> 例えば「◎（水泳の）飛び板（a spring board）のようなものである。」「◎人生における過渡期だと思う。」などの回答があった。

- ◎私にとって、日本語教師になるという夢に近づくのに、絶対必要な経歴・過程だと思う。
- ◎自分の人生にとって大事なものや自分が知りたいことについて考えさせてくれた。
- ◎大学院での勉強は私を多くの物事に啓蒙した。
- ◎自分（特に物事の考え方と表現の仕方）を鍛えるよいチャンスだと思う。
- ◎日本語学科の大学院は私にとって非常に大事な存在である。そこで出会った先輩、同級生たちが互いに協力し合い、良きライバルとなり、自分の未来を考えさせる場所でもある。
- ◎それ以降の人生観に影響を与えた。視野を広げてくれただけでなく、物事をより広くかつ多角的に考えさせ、現状を疑問視する習慣を付けてくれた。
- ◎日本語学科の大学院は土のようなもので、私たち院生は種に当る。大学院はわれわれに栄養を与え、私たちを育ててくれた。しかし、うまく生長できるかどうかは種の硬い殻を破ることができるか否かによるものである。
- ◎ずっと前から私の夢だった。だから、修士論文を出した瞬間、やっと夢を叶えたという感じが強かった。とても充実した、嬉しい気持ちになった。
- ◎台湾一の豪邸「帝宝」のような、つまり“いったん入居したら永遠に忘れられない”ゴージャスなものだ。

ほとんどの大学院生は、大学院を修士号という学位を獲得する場所だと思うだけでなく、自分の人生における重要な段階だと認識している。

### 3. 大学院生の“日本語学科の大学院”への執着度

前節（2. 訪問調査）で得た資料から、大学院生（①～⑳）の“日本語学科の大学院”（QA～QI）への執着度、こだわりを3段階に評価してみた。ここで、日本語学科の大学院への執着度が高いものを“○”、執着度が低いものを“×”、中程度のものを“△”としたのである。その結果をまとめると、以下の表2のようになった（数字は人数を表す）。前節（2. 訪問調査）に列挙した①～⑳の抜粋<sup>33</sup>の他、インタビュー全体の雰囲気、インタビューの音調、表情などを含めて筆者が判断した。“日本語学科の大学院”を非常に愛し、認め（または認めてもらいたい）、帰属感が最も高いと思われた場合は「○」、それに対して“日本語学科の大学院”に重きを置いておらず、どうでもいいと考えている節が見えた場合は「×」とした。また、その中間に位置し（例えばQCに対する「◎また受け続け

<sup>33</sup> 注9を参照。

たと思うが、別の大学院を目指すようになっていたかもしれない。」や、QG に対する「◎苦勞しているが、得もある。」、のように、いわば正・反両面の意見が混在するものは「△」とした。

表2 大学院生の“日本語学科の大学院”への執着度のまとめ

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	計
○	3	16	1	11	5	7	0	6	12	59
△	5	1	6	8	10	7	17	12	8	69
×	12	3	13	1	5	6	3	2	0	43

全体的に、日本語学科の大学院への執着度が高い“○”は三分の一を超えているが、執着度が低い“×”と比べて特に多いわけではない。最も多いのは中間的な“△”である。

一方、今回の調査で院生たちの進学前から卒業後までの状況を図にしたら、付録のようになった。

#### 4. 終わりに

台湾における6つの日本語学科の大学院生20名を対象に半構造化インタビューを行い、院生の生の声を聞き取り、まとめてみた。

インタビューからは、院生ひとりひとりの事情に基づく進学前から卒業後までにおける日本語とのかかわりが伝わってきた。また、それらをまとめて全体的に見ると、日本語学科の大学院を修士号という学位を取る場所だと道具のように思う者も何人かいるが、基本的には自分の人生にとって大事な場所で、日本語力や研究に必要な力を身に付けさせ、自分を成長させてくれたということを表明している。つまり、大多数の人は日本語学科の大学院を肯定的に見ていることが分かる。ただし、前掲表2の「×」、つまり大学院への執着度の低さの理由をより深く考察することが、今後の課題として残されている。

本稿は、日本語学科の大学院に進学したいと考える学生にとっても、日本語学科(院)が院生に接する際にも参考になるだけでなく、院生の未来像を描くうえで、ひいてはより多くの大学院生を集めるうえでも参考になるとと思われる。

#### 参考文献

中国語

謝臥龍編；王雅各他著（2004）『質性研究』心理出版社

陳向明 (2002) 『教師如何作質的研究』 洪葉文化事業

羅文基・朱湘吉・陳如山 (1991) 『生涯規劃與發展』 國立空中大學  
英語

Geertz, Clifford (1973) 『The Interpretation of Cultures』 New York: Basic Books  
日本語

王敏東・鄭凱文 (2011) 「台湾における日本語学科の大学院生の生涯についての  
調査研究」 『東呉日語教育學報』 第36卷

工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元 (2010) 『質的調査の方法』 法律文化社

ダニエル・ベルトー著；小林多寿子訳 (2003) 『ライフストーリー：エスノ社会  
学的パースペクティブ』 ミネルヴァ書房

鄭凱文 (2011.3.19) 「日本語学科の大学院生の生涯についての調査研究—出身学  
科、留学経験、卒業との関係をめぐって—」、日語的研究・教學・運用シンポ  
ジウム、大葉大学

西條剛央 (2007初版 (2009初版5刷)) 『ライブ講義・質的研究とは何かSCQRM  
ベーシック編』 新曜社

堀薫夫 (2009) 「ポール・バルテスの生涯発達論」 『大阪教育大学紀要 第IV部  
門 教育科学』 58 (1)

『情報・知識 imidas』 (ニッポニカ)、ジャパンナレッジ (オンラインデータベ  
ース)、入手先<<http://www.jkn21.com>>

## 付録



